

ミュージック・ケアの事例から考える 音楽療法における「たのしさ」の意味

—— 重度身体障害者を対象としたセッションのフィールドワークをもとに ——

西島千尋

要旨

筆者は2015年より音楽療法の一手法であるミュージック・ケアの調査研究を行ってきた。2017年に論文「日本音楽療法史におけるミュージック・ケアの位置づけとその特性」をまとめ、ミュージック・ケアの日本の音楽療法史上への位置づけを行った。さらに2018年に「ミュージック・ケアのフィールドワークから考える音楽療法の意義—QOCL（クオリティ・オブ・コミュニティ・ライフ）」と題し、セッションの参与観察および実践者へのインタビューから、ミュージック・ケアにおける価値観を明らかにした。

本論文では、セッションの実践者側に着目するだけでなく、対象者側にも着目した事例検討を通じて、ミュージック・ケアの特徴および音楽療法の意義に迫りたい。取り上げる事例は、遷延性意識障害（植物状態）と診断された患者が対象のセッションである。対象者は自宅療養となってから約14年間、ミュージック・ケアのセッションを受けている。対象者および対象者の家族にとってミュージック・ケアのセッションがどのような意味をもっているかを、セッションの参与観察および対象者へのインタビューから明らかにする。

キーワード：ミュージック・ケア，加賀谷式音楽療法，音楽療法，重度身体障害者，
ミュージッキング